

都市土木とか一般土木とかいった言葉が専門誌の誌面に登場するようになったのは、昭和40年頃からの現象である。しかし、その背景となったのは何といても東

京オリンピックを頂点とした、すさまじい建設ブームであろう。“ARRIUEDERCI A TOKYO 1964”の電光文字がローマの夜空に消えた

1960年からの4年間は、空港・地下鉄・高速道路・上下水道・通信施設・新幹線など、オリンピックに直接かわりがない事業まですべて繰り上げられ、建設オリンピックと呼ばれながら、昼夜兼行の猛工事が続いたものである。いつの間にか世界最大の大都市に膨張してしまった“偉大なる村落東京”にとって、オリンピックこそ首都整備のための、またとない切り札となったといえる。

さまざまな犠牲のもとに東京大会は成功し、以後何年かにわたって東京の都市機能は著しく改善された。それまでは自然を相手にした構造物をつくる機会が多かった土木技術者達にとって、この頃から都市内土木工事の手ごわさが急速に認識されだしたのである。路面の一般交通に支障を与えず、沿道住民の生活を守り、日常の都市機能を損なうことなく新しい構造物をつくるためには、従来の土木技術では解決しにくい、さまざまな問題が提起されてきた。昭和26年に始まり37年に全線開通した地下鉄丸の内線（池袋—東京—新宿—荻窪）工事は、本格的な都市土木工事第一号として、あらゆる辛酸を関係者はなめさせられたという。

ガス洩れ・陥没・水道管破裂・騒音・振動など、年とともに高まる住民の公害意識とともに、都市土木に対する風あたりは、ますます激しい。だが、都市集中型経済を維持し発展させてゆくためには、従来にもまして都市機能の拡充は不可欠であり、都市土木への比重は高まる一方である。

清水建設(株)土木部工事課長であり、新宿地下駐車場作業所長を兼ね、ほかに3つの作業所を統括している小林治郎さんは、昭和39年から都市土木一筋に歩み続けてきた貴重な存在の一人。新宿の繁華街の真下にぶち抜かれた現場へもぐり込んで、都市土木に全力投球する小林さんの日常の一端に触れてみた。

東京の副都心である新宿は、国鉄・私鉄・地下鉄・バスなどの輸送機関が集中、国電だけで1日の乗車人員は50万人を越えるという日本一のマンモス駅をかかえている（注：1969年の調査によると、国鉄の1日乗車数は新宿を1位として以下順に池袋、大阪、東京、渋谷、天王寺、新橋、有楽町、上野、川崎の各駅がベストテン）。各種の輸送機関を加えると1日の乗降客は160万人といわれ、過去いくたびか再開発を繰り返しつつ圏域を拡大した。西口の旧淀橋浄水場跡10万坪も着々と整備され、最近では47階・170mという日本最高のホテルも完成し話題をよんだ。

新宿地下駐車場は、東口の新宿通りに平行して走る靖国通りの地下15000㎡を3階まで掘り下げ、330台収

容の駐車場と商店街をつくろうという工費100億円の民間工事で、幅40mの道路下を清水建設、フジタ工業がそれぞれ150mずつ、前田建設工業が50mを分担施工中である。

当初の計画では、第3期工事までで現在の東口地下道と三光町で結んでU字型とする構想であったが、第1期工事を半ばにして種々の難問に突きあたり、工事の進捗も芳しくないばかりか、工事費の大幅な削減をも要求されているという。現在の進捗率は約40%、昭和47年12月開業という目標もかなり苦しいものになってきたというから、小林所長の顔色がサエないのは当然であろう。「ここは恐らく東京中で一番地下埋設物が多い場所ではないでしょうか」と小林さんが指さすとおり、頭の上には老朽化した1500mmの水道管、1100mmの下水管、15万ボルトの高圧ケーブル、200mmのガス管、電話ケーブルなど、無気味なまでに、びっしりと並んでいる。それぞれ厳重に吊り防護や受け防護を施してあるというが、都内有数の交通量をもち、それも重量運搬車両が多いという道路下だけに、ボルト1本ゆるんでも大変な事故になることが予想される。腹に響くような轟音を残して絶え間なく走り去る頭上の振動に首をすくめながら、「カミソリの刃を渡るようなスリルの連続でした」という小林さんの言葉が、ずしりと胸にこたえる。「安全性には自信をもっています。しかし、万一のことがあるからこの危険物を早く共同溝に入れてしまいたい。しかし、問題がむずかしすぎて、なかなか進みません」小林さん

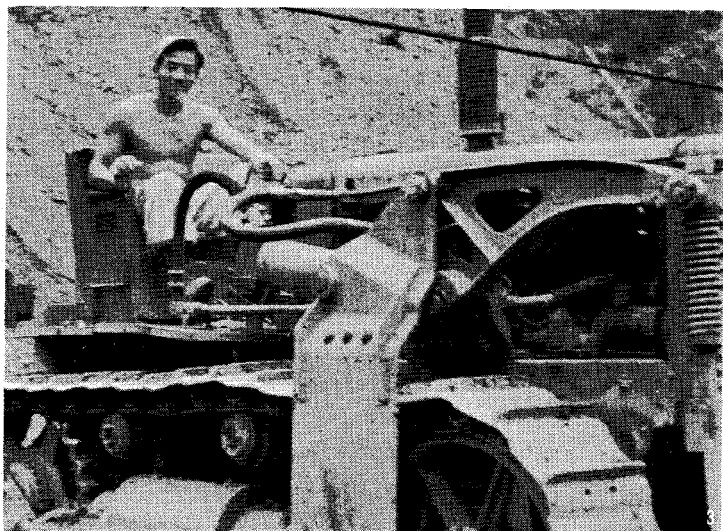
工 事 名	工事種類	工事内容
宮川総合開発事業1工区、 宮川第一発電所	水力発電	ずい道
宮川総合開発事業2工区、 宮川第一発電所	〃	ダム発電所
鷹来紡績扶桑工場新築	工場基礎	一般工事
東海疏安四日市工場新築	〃	地下構造物
三菱油化四日市工場敷地造成	敷地造成	機械土木
三菱油化四日市工場海水取入路	上下水道	地下構造物
四日市港第三埠頭	港湾	港湾構造物
四日市港小野田棧橋	〃	〃
東亜燃料清水工場埠頭補修	〃	〃
南陽海岸堤防第1号	河川	河川構造物
伊勢湾台風高潮対策	〃	〃
東海道新幹線中川地区路盤その他 黄金跨線橋築造	鉄道 道路	高架橋 高架橋、基礎杭
興和化学静岡工場 橋梁、道路、下水設計	〃	一般工事
東横線中目黒駅改良	鉄道	高架橋
国立屋内総合競技主体育館その他	一般	一般工事
田園都市線上野毛高津間線路変更	鉄道	高架橋
東横線大倉山停車場改良	〃	〃
営団地下鉄9号線町屋工区	地下鉄	地下構造物
新宿地下駐車場新築	地下街	〃

の嘆きは深刻だ。何しろこの事業には、都第三建設事務所・首都整備局・建設局・水道局・下水道局・電々公社・東京ガス・東京電力・それに警察や沿道住民、はては上を歩く通行人までが関連してくるというから驚きである。

小林治郎さんは昭和6年生まれの生粋の横浜っ子である。地元の関東学院を中学から高校まで通し、25年に日大土木へ、そして29年の卒業と同時に清水建設土木部へ入社している。文化元年(1804)創業の清水建設は、竹中工務店に次ぐ最古の歴史を誇る建設会社だが、主力は民間の建築工事であり、土木の比率はきわめて低かった。しかし、昭和27年頃から順次土木部門の充実をはかりつつあった。不景気の最中だった29年に採用された土木系7人の新人にかけた会社の期待は、それだけに大きかったに違いない。小林さんの経験を支える多種多様な現場あるきは、清水建設土木部の将来をになうべき人材育成のための特別なコー



施主	在任時期 (昭和年月)
三重県	29.4~29.9
〃	29.10~31.6
属来紡績	31.7~31.11
東海疏安	31.12~32.2
三菱油化	32.3~33.2
〃	33.3~34.1
三重県	34.2~34.6
小野田セメント	34.7~34.9
東亜燃料	34.10~34.12
建設省	35.1~35.11
愛知県	35.12~36.5
国鉄	36.6~37.12
名古屋市	38.1~38.10
興和化学	38.11~39.4
東急電鉄	39.5~39.6
東京都	39.7~39.9
東急電鉄	39.10~41.7
〃	41.8~41.9
営団	41.10~44.8
新宿地下駐車場(株)	44.9 現在に至る



スと見ることもできよう。

小林さんの多彩な経歴を一括してみれば別表のようになる。

電源開発ブームにのる発電所工事を皮切りに、石油コンビナート、伊勢湾台風による復旧工事、新幹線、名古屋市都市改造事業、そして以後につながる一連の都市再開発事業は、そのまま日本経済の進展と構造の変化を示しているようで、まことに興味ぶかい。自然の力の恐ろしさをとことんまで味わされた伊勢湾台風は、何ものにもかえがたい体験だったそうだ。

小林さんが統括する新宿作業所は清水建設としては都内最大で 32 名の入達が働いている。「根性・融和・温情」の三語が大きく張り出しているが、温情とはきびしいもの、つまり部下を教育するとき、その人の将来を考えて、とことんまで教えてやれば、難関にあっても克服できる、これが真の温情だと信じていると小林さんはいい、「きびしい職場環境から本当の融和が生まれるんで、酒やマージャンのつき合いは、決して融和にならない」と力説する。部下や下請の間でも、やかましいが頼りがいのある人物と、評判はすこぶるよい。

「都市土木の現場は正直のところ、いっどこで何が起るかわからないから私だってこわい。しかし、こわがっているのは仕事にはならない。こわさを全部知ったうえで、仕事をやれ……」小林さんが若い人達によくいう言葉だ。社会問題にこそなっていないが、何回か血の凍るような思いをした第一線の部隊長ならではの悟りなのだろう。

小林さんは親子二代の土木一家である。父君の源次氏は戦前は内務省技官をつとめて外地を歩き回り、戦後は民間に出て現在は日立コンクリート専務の要職におられる。弟さんも日大から大成道路へ入り、今年の2月から清水建設に移り、今は横浜の地下鉄現場とのこと。「夢を後世に託すために息子がいたら土木屋に育てたい」そうだが、小学校3年生のお嬢さんの下に、遅まきながら目下二人目のお目出度が進中だから「希望は捨てていない」と明るい。柔道3段で空手の心得もある 167 cm・67 kg の見事な体格、趣味は海釣り・ゴルフなどだが、



ますます閑がなくなるとこぼす。

「都市の大改造をやらねば文明の進歩が止まる。自分は都市土木に生涯をかける。どんな難工事でもやりとげる自信はある」と言いきって迫力ある都市改造のエースは、本社からの呼出しにあわだしく飛び出していった。

【写真のことは】

1. “都市のもろさ”を身に沁みて知っている人だ。ボルト1本ゆるんでも大事故につながるだけに、点検の目は細かく鋭い。167 cm・67 kg、ヘルメットがぴったりと似合う迫力のある人物。
2. 「都市土木屋はエンジニヤというより抄外屋」というように、通行人の苦情処理まで所長の仕事になる。
3. 学校を出て土木屋生活のスタートをきった 宮川第一発電所工事現場でブルを動かす小林さん（昭和 30 年 6 月）。若いながらチョビヒゲを立て、堂々たる風格ぶり？
4. 横浜市綱島のご自宅で桂子夫人、裕子ちゃん（3年生）、愛犬コロとくつろぐ小林さん。息子が生まれたら土木屋に……小林さんの夢だそうである。

●ひとシリーズ● 次回は梅沢喜代作氏（株式会社本間組 新潟東港作業所長）の港づくり 50 年の人生をご紹介します。予定です。ご期待下さい。